



TITLE:

鏡花文学の研究 ー同時代的な背景の検討を通してー( Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

白方, 佳果

---

CITATION:

白方, 佳果. 鏡花文学の研究 ー同時代的な背景の検討を通してー. 京都大学, 2015, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18722>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	白方 佳果
論文題目	鏡花文学の研究——同時代的な背景の検討を通して——		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>泉鏡花は、明治、大正、昭和の三代にかけて活躍した金沢出身の小説家である。彼の文学に前近代的な文芸の影響が色濃いことは、言を俟たない。とはいえ、もちろん鏡花が「近代」という同時代の事象に無関心であったということではない。むしろ鏡花は同時代の事象を作品に積極的に取り入れてきたのであり、本稿は鏡花文学のこうした側面に注目したものである。</p> <p>鏡花が同時代の社会に強い関心を払っていたことは、鏡花の文壇出世作である『夜行巡查』（明治二十八年四月）『外科室』（同六月）といったいわゆる「観念小説」と呼ばれる作品、あるいは初期の『貧民倶楽部』（明治二十八年七～九月）、『海城発電』（明治二十九年一月）などといった社会的な傾向の強い一連の作品があることから知れよう。こうした鏡花の姿勢を考えるなら、多くの先学らによって指摘されてきた近代以前の文芸の影響と同様に、同時代の社会現象や事件等についても注目した考察が不可欠である。本稿では同時代的な話題の摂取がこれまで見過ごされてきた、あるいは注意されながらも十分には論じられてこなかった三作品を検討の対象とした。これらの作品に、前近代と同時代の両方を視野に入れた注釈的な読みを基盤とした考察を加えることを通して、同時代の話題や空気を作品に取り入れつつ、前近代的な文芸の影響と独自の理想のもとに作品世界を創出した鏡花の文学の一側面を明らかにすることを試みた。前近代の文芸から強い影響を受けつつも、一方で「近代」を同時代として見据えてきた鏡花の文学の一側面を明らかにする本稿の試みは、鏡花文学、また近代文学の研究において資するところがあると考えらる。</p> <p>I 部では、『錦帯記』（明治三十二年二月）を検討の対象とした。本作は主人公・相良お礼の来歴と、彼女が自分の所有する貧乏長屋の店子たちと対立し、殺害されるまでを描いた作品である。本作を注釈的に読み、鏡花の他の初期文学との繋がりや、同時代の話題の摂取などの観点から論じることで、本作の読みに新しい視点をもたらすと同時に、鏡花の創作態度の一端を明らかにすることを試みた。作品分析においてはとくに、「中央公論」無署名「近作一瞥」欄（明治三十二年四月十五日）で紹介された暁霜の評に注目した。この同時代評の読みを起点として、本文の改訂や時代的な感覚のずれによって現在では見えにくくなっている問題を、実証的に裏付けて論じることに努めた。以下、各章について詳述する。</p> <p>一章では、『錦帯記』の作品論に入るための準備として、同時代の素材の利用のされ方を検討した。本章ではまず、作中冒頭から印象的な小道具として登場する煙草「Isabella」に注目した。新聞広告を根拠にこの煙草「Isabella」が実在することを指摘した上で、この煙草「Isabella」からの連想によって同時代の歴史的事件「米西戦争」や、スペインの「女王 Isabella」のイメージが作品に取り入れられていることを論じた。また作中で語られる、お礼が煙草「Isabella」を真似た煙草「さがら」を</p>			

売り出したというエピソードは、煙草「Cameo」を真似た煙草「サンライス」を売り出して成功し「たばこ王」と呼ばれた実在の人物・村井吉兵衛の逸話が素材として利用されていることを指摘した。

またお礼の悪女としての側面に注意を払う先行研究の指摘に私見を加えて論じた。お礼が山東京伝の読本『善知鳥安方忠義伝』などに登場する「滝夜叉姫」に見立てられていることは、すでに須田千里氏によって指摘されている。本稿は暁霜評が「『マニラ』煙草の上包の『イザベラ』の面影のある」と述べることに注目し、本文を丹念に読み込めば、彼女には「滝夜叉姫」だけでなく「女王 Isabella」のイメージも重ね合わせられていること、またこうした趣向が、初出以降の本文改訂によって見えにくくなっていることを指摘した。またお礼は先行研究において、しばしば「悪女」としての側面に注目がなされてきた。しかしながらお礼は、彼女と敵対する貧乏長屋の住人から「悪女」と見なされる一方、かつて不遇な境遇にあったときにお礼から恩を受けたもう一人の主人公・浦里時次郎からは「貴婦人」というイメージで捉えられている。浦里にとってお礼は「恩ある貴婦人」であり、現在は不遇な境遇に置かれている彼女の哀れな現状が、近代の烈女伝などにしばしば登場し、不遇な時代のコロンブスを救った逸話でも知られるカスティリア女王「Isabella」、そして同時代に米西戦争に敗北しつつあったスペインのイメージを象徴する存在としての女王「Isabella」に重ねられている事を指摘した。

本稿では暁霜の評を起点として論考を進めることにより、複雑な経歴と性格を備えたお礼の人物像を理解するには、「Isabella」と「滝夜叉姫」という二人の女性のイメージが、お礼の人物描写に利用されていることを考える必要性を指摘した。以上の検討で、従来指摘されてきた前近代的な素材に加え、同時代の素材を摂取し作品の中に巧みに取り入れていた鏡花の試みが明らかになると同時に、「悪女」としての側面が強調されてきたお礼の人物造型に対して、新たな見方を示すことができた。

二章では浦里からお礼に贈られ、表題にもとられた「蝦夷錦の帯」が明らかな「まやかしもの」(=贋物)であることと、お礼の人物像の関連を中心に検討した。作中で浦里が蝦夷錦の帯を購入する経緯は、作品発表当時の新聞でしばしば報じられていた詐欺事件の手口を素材としている。この贋物の帯を贈られるお礼の身なりは、鍍金の指輪など、「まやかしもの」尽くしであることが作中で明らかにされている。こうした身なりは同時代の規範においても、また鏡花の美意識においても否定されるものであるが、鏡花がなぜ、女主人公であるお礼にこのような身なりをさせたのかという疑問を提示するところから論を始めた。

この問題を考えるためにまず、お礼と同様に、草双紙の女主人公に見立てられた女性である『絵日傘』のお民とお礼の共通点について考えた。彼女らが見立てられた草双紙の女主人公たちの共通点は、いずれもある「反体制的な目標」(須田千里氏、平成十四年三月)を抱いていることにある。また暁霜の評で、お礼は「人につきぬけた、大きな望み」を抱いている、と評されていることに注目した。「反体制的な目標」を抱く「悪女」滝夜叉姫を意識しつつ造形されたお礼が抱いていた望みは、身を立て成り上がり「女王の如く崇められやう」という、近代的な上昇志向、立身出世の願望であった。お礼の望みは、父の仇を討ち国家転覆をはかろうとする滝夜叉姫らの

それと比べると、スケールの小さい、私的で卑小なものに見える。しかし当時の職業観では正業とはみなされない私娼から高利貸となり、一財産を築くまでに至った彼女の経歴からすると、彼女の望みは同時代の通念においては受け入れられがたいものであり、社会に対する反逆といえるほどの異例なものであった可能性を、同時代の資料の記述によって裏付けつつ論じた。

お礼の最期は、彼女の「見栄を為たい」「女王の如く崇められやう」という望みが砕かれ、「まやかしのもの」づくしの己の身を振り返って「所詮まやかし」「こんなになっても見栄が為たい」ものかと述懐し、またそうした願望を支えた彼女の自尊心が根底から揺るがされた末のものであった。女性の立身出世に強い制約があった時代に、最下層から自力で成り上がったものの、常識外れの行動と虚栄心ゆえに世間から厭まれ、戦い破れ、最期は己を「みんなまやかし」と自嘲したはてに殺害されたお礼という女性の半生を美しい「まやかしのもの」の蝦夷錦の帯に託したのが、この『錦帯記』という物語であったと結論づけた。お礼の死は、従来の研究で「凄艶にしておおかつ惨め」と評されていた。しかし浦里の「贋物でも綺麗だから良い」という発言や、贋物の帯を身に付けたまま死んだお礼の死骸が、その美しさのために浦里と「結婚」することも暗示される結末をふまえれば、彼女の虚飾と死は同情をもって肯定的にとらえられ、救済を得ていると論じた。

Ⅱ部では、『霊象』（明治四十年一月）を検討の対象とした。本作は元富豪・山名藤次とその妻・美波子の心中未遂事件が、美波子と幼なじみの志摩吉が共謀して夫を毒殺した殺人事件だと誤解されたことを端緒に展開される物語である。裁判で毒殺事件ではなかったことが明らかになるが、新聞などのメディアにあおられて憎悪を募らせた世間の人間は、美波子らを夫殺しの姦婦姦夫として糾弾する。その後出獄したものの「社会の制裁」を加えられそうになった美波子を、白象に乗った志摩吉が助け出す、という筋書きである。あまりかえり見られることの多くなかった本作を注釈的に読み解き、素材や主題を明らかにすることを試みた。

三章では、作品の素材を中心に検討した。作中では明言を避けられているものの、本作の舞台は明らかに鏡花の故郷・金沢であり、また登場する人物たちのモデルも、鏡花の金沢における知人とその関係者であった。

本作は先行研究において、作中の新聞報道が群衆を煽る「スキャンダル装置」として描かれ、語り手がそれに冷ややかな視点をそそぐ点に注目がなされてきた。こうした趣向の背景には、日比谷焼き討ち事件をめぐる同時代の状況があると指摘されていたが、本稿では作中の殺人事件をめぐる新聞報道で「悪三郎」という語句が登場することに注目した。悪三郎と表記に微妙な変更を加えてはいるが、これは本作と、明治三十八年五月から世間を騒がせていた「野口男三郎」による実在の殺人事件との関わりを示す証左となる。『霊象』作中の事件と、現実世界で起きた男三郎の事件は、①虚実入り交じった扇動的な新聞報道が行われた、②男女が共謀して、二人の仲の障害となる男性を毒殺したと報じられた、③事件の真相がはっきりせず、当初の見込みとは外れた判決が出る（疑獄事件）という三点が共通している。事件をめぐる過熱する新聞報道や、それに煽られる民衆の姿を語り手に揶揄させていることも考え合わせると、作中の事件に関する趣向は、男三郎事件をめぐる同時代の狂騒を、物語に批判

的に摂取したものとして理解できることを指摘した。

美波子の志摩吉に対する思慕は、法廷において語られないことによって逆接的に裏付けられていることが、西尾氏によって指摘されている。本稿では、美波子の描写に謡曲『松風』などに登場する海人乙女・松風という古典的イメージが利用されていることを指摘した。本作が作品集『由縁文庫』収録時に「松風」と改題された事を考え合わせても、この「松風」のイメージは鏡花が意図的に仕組んだものであり、このイメージによって西尾氏の指摘した法廷の場面以前でも、美波子の志摩吉に対する思慕が暗示されていると指摘した。

また『霊象』では、美波子らを見世物のように扱う新聞メディアによって煽動された世間の人々が、事件の真相が明らかになった後も誤解に基づく認識を改めず、美波子らに「社会の制裁」を加えようとする様子を揶揄しつつ描く。ここにみられる「社会の制裁」に対する語り手の嫌悪は、鏡花の談話『犯罪と小説』（明治四十二年九月）における主張と通じるものである。この談話での発言を考え合わせると、本作の主眼は事件そのものを描くことではなく、その事件を通して浮かび上がる「不法なる社会の制裁」への反抗にあったと指摘した。

四章では、前章で指摘した、本作の主眼である「不当なる社会の制裁」への反抗が、「霊象」に乗った志摩吉が群衆の中から美波子を救い出す場面として現れていると指摘し、この救出劇がどのようなかたちで実現されているのかについて詳細に論じた。まず主人公たちに関する記述に、物語冒頭から「地獄」にまつわる表現が頻出することを指摘した。事件発覚から美波子の出獄にいたるまで、仏教的な他界、「地獄」にまつわる用語を用いた修辞が多々見られる。とくに美波子が出獄し、救出劇の舞台となる監獄の門前は、地獄の門として語られる。ここに現れ、群衆の中から美波子を救い出す「霊象」は、従来の先行研究では、前近代の仏教的文芸にみられる白象のイメージの影響が指摘されてきた。

本稿では、作中の文言を踏まえれば、本作の結末は世間に容れられない恋を成就させた主人公たちが、象の見世物師となり畜生道に堕ちるというものであるとする解釈を示した。鏡花の作品では、「畜生の世界に足を踏み入れることは、恐ろしい、しかし甘美な体験」として描かれることが須田千里氏により指摘されており、こうした趣向を持つ作品は珍しくない。本作の結末をこのようなものとして捉えるならば、素材として指摘されてきた前近代の仏教的文芸の白象たちと本作の「霊象」の向かう先は、極楽と畜生道と、同じ仏教的な他界ではあるが、まったく異なるものである。このように考えると、本作の「霊象」には、仏教とは関係のない、別の素材の影響も指摘できるのではないかと指摘した。その素材とは、ジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』である。『霊象』と『八十日間世界一周』は、①寡婦となった美女が夫と死ぬか「社会の制裁」をうけるかの二者択一を迫られる、②美女は夫とともに死ぬことよりも生きることを望んでいる、③美女が群衆（僧侶や老婆〔勲章婆／醜悪な老女の姿をした女神の像〕）に囲まれて危機に瀕している、④紳士と象使いの一行が美女を救い出し、木々の中を象に乗って逃げる、⑤紳士と救い出された美女が結ばれる、という展開が類似している。とくに前章で指摘した、本作の主眼にある「不当なる社会の制裁」への反抗といったモチーフの一致は注目に値するものであり、『八

十日間世界一周』は『靈象』の救出劇の材源の一つであり、従来関心が払われてきた、本作の「異国情緒」の源泉の一端であると認めてもよいのではないかと論じた。

Ⅲ部五章では、泉鏡花『恋女房——吉原火事——』（大正二年十二月）を検討の対象とした。本作吉原の引手茶屋の娘で現在は根岸の良家に嫁いでいる女主人公お柳が、吉原の大火をきっかけに吉原に戻り、焦土となった吉原を再生することを決心するが、吉原を焼いた妖精・赤魔姥と対決した結果、夫と共に原因不明の熱病で倒れてしまう。周囲の尽力もあり病に打ち勝った夫婦を見た赤魔姥は、自らの敗北を認めて去る、という物語である。本作が同時代の吉原大火という事件を背景にしていることについては、従来の研究でも注目されてきたが、部分的な指摘に留まり、本作を同時代の文脈において、十分な検討を加えたものはない。

本稿ではまず、本作における〈江戸情調〉がどのように描かれているかについて検討し、鏡花の〈花柳もの〉における本作の位置づけを検討する。その上で、本作で利用された「吉原大火」という同時代の素材が、作中でどのように消化されているかについて検討する。結末において、大火によって跡形もなく消失した吉原が、江戸の意気張りを備えた美女・お柳によって「極楽浄土」のような場としてよみがえることが暗示されるが、ここで暗示される未来は、大火後に復興されつつあった、現実の吉原の実情とは大きく異なるものである。これを同時代の新聞雑誌における記述や、鏡花の他作品における描写などを参照しつつ指摘した。吉原大火という現実の話題を素材にしつつも、吉原が「極楽浄土」として再生する未来図を暗示して閉じられる本作の結末は、吉原が衰退しつつあった当時の現実から大きく逸脱している。こうした現実から逸脱した結末を迎えるために、一度赤魔姥に敗れた女主人公が、観念的な心中を経る必要があったことを指摘した。最後に、鏡花と同じく江戸の情調やかつての吉原の風情を愛した永井荷風の随想と比較することで、同時代の話題を取り入れながらも、現実にとらわれず、現実とは乖離した理想的な吉原の幻を描く点に本作の特徴があり、またそうした点に、鏡花文学の魅力があると結論づけた。

(論文審査の結果の要旨)

泉鏡花の文学が江戸時代以前の演劇や文学の影響を強く受けることはよく知られ、繰り返し論じられてきたが、同時に「近代」という同時代の事象にも強い関心を持ち、それらを作品中に積極的に取り入れていた鏡花には、従来の研究は必ずしも大きな関心を持ってこなかった。それが鏡花文学の理解を一面的にしてきたことを、本論文の注釈的な研究は明らかにしようとする。

本論文の第一部は『錦帯記』という作品を読み解く。その主人公のお礼は、私娼から這い上がり、高利貸などをした末に人々に憎まれ、終には惨殺される美女であるが、その人物像に山東京伝『善知安方忠義伝』に登場する毒婦滝夜叉姫を重ねて読解する秀れた先行研究をうけた論者は、それと同時に、スペインの女王イザベラの面影がお礼の上に投影されていることを指摘する。「『マニラ』煙草の包紙の『イザベラ』の面影のある」という一節に着目した論者は、その煙草の新聞紙広告の絵姿を突き止めた上で、女王イザベラによって象徴されるスペインが、この小説執筆の同時期にアメリカとの戦争に敗れつつあったという歴史的な背景を描き出し、さらには、お礼が店子たちになぶり殺しにされる「八月十二日」が、スペインが実質的にアメリカに敗北した停戦の日であったことを指摘する。その日付の一致は偶然とは思われず、この小説の隠微な趣向がここに白日のもとに曝されたという感がある。のみならず、殺される時にお礼が締めていた帯がそのころ詐欺師たちが売り歩いていた偽物の蝦夷錦の帯であったという小物の考証から、お礼が私娼からのし上がろうと強い出世の願望をいだいた末に挫折したこと、「まやかし」の生の果てながらその死に憐憫をいだく男が描かれ、それが作者自身の投影とも見られることなどの人物論、主題論まで、近代小説としての「錦帯記」の特色は、この論考によって見事に説き尽くされているであろう。

第二部は、幼なじみの愛人と共謀して夫を毒殺したという疑いをかけられ、刑期を終えた日にも姦婦として糾弾されて寺に入れられようとした女性を、愛人とされた男が救い出すという小説『霊象』を論じる。論者はその素材として、謡曲『松風』があったことを挙げた上で、同時代に世間を騒がせた毒殺事件が利用されていることを指摘し、さらに、女が見世物の白象に乗った男に救出されるという大団円の趣向が、それを釈迦や普賢菩薩などが白象に乗って現れることと重ねて理解する従来の研究に対して、むしろジュール・ヴェルヌ『八十日間世界一周』に拠るものと考えられることを説く。論者は、鏡花がヴェルヌを読んでいたことを周到に考証した上で、『八十日間世界一周』の第十二章に、象に乗って印度を旅行するフォッグ一行が、夫に殉死するように人々に強要されている寡婦を象に乗せて救いだす場面があることを紹介する。それと『霊象』の結末の場面とを比較した上で、鏡花がこの『八十日間』を利用したこと、それがまた『霊象』という作品に漂う異国情緒のもとになったことを指摘するのである。その考証はよく行き届き、十分に説得力をもつ典拠論となった。また典拠が明らかになることによって、その作品の主題はより明快に理解できるようにもなった。

本論文は、明治三十年代から大正初年にかけての鏡花作品三作を、同時代の社会

背景、鏡花が同時期に読んでいた書物などに手がかりを求めて読解する試みであった。作品三つは、鏡花文学の全体像を知るためには少なすぎることはもちろんである。しかし、新聞記事から外国翻訳小説までほとんど無限にある資料群の渉猟にどれほどの時間を要したかを考えると、三作だけを徹底的に読み抜くという本論文の態度は間違いではなかった。作品の分析に最もふさわしい事象を見いだし、それを的確に論証に用いたことが、本論文の大きな功績となった。

惜しむらくは、せっかくの新発見がしかし十分に活用されずにあっさり投げ出される場合があるように思われた。自らの発見に執着し、それをどこまでも掘り下げて行こうという執念が、論者にはさらに求められるのではないか。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十七年二月十六日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第十四条第二項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。